

ダニエル書 - 第六十九号

世代の循環を解き明かす：アドベンチズムの四つの忌むべきもの

Jeff Pippenger

2024-02-02

神は決して変わらない。それゆえ、アドベンチズムは自らの第四世代において裁かれる。

「そして彼は、亜麻布をまとい、腰に書記の墨つぼを帯びた男を呼んだ。主は彼に言われた、『町のただ中、エルサレムのただ中を通して行き、その中で行われているすべての忌むべきことのために嘆き叫んでいる人々の額に印をつけよ。』主はまた、私の聞いているところで、ほかの者たちにも言われた、『彼のあとに続いて町を通り、打て。容赦するな、憐れむな。老いも若きも、娘も幼子も女たちも、ことごとく殺せ。ただし、印のある者には近づくな。わたしの聖所から始めよ。』そこで彼らは、家の前にいた長老たちから始めた。」

イエスは、天の聖所の贖罪所を離れて復讐の衣を身にまとい、神がお与えになった光に応じなかった者たちに対して、裁きとして御怒りを注ぎ出そうとしておられる。「悪いわざに対する刑が速やかに執行されないので、人の子らの心は思いきって悪を行うようになる。」主が彼らに対して示してこられた忍耐と長い寛容によって心が柔らかいところか、神を恐れず真理を愛さない者たちは、その悪の歩みにおいて心をかたくなにする。しかし、神の寛容にも限度があり、多くの者がその境界を越えている。彼らは恵みの限界を踏み越えてしまったので、神は介入し、ご自身の名誉を守らなければならない。

アモリ人について主は言われた。「第四代に至って、彼らは再びここに戻って来る。アモリ人の罪はいまだ満ちていないからである。」この民は偶像崇拜と墮落のゆえに際立っていたが、その罪の杯はまだ満ち切っておらず、神は彼らをことごとく滅ぼすよう命じられなかった。人々が言い逃れの余地を残さないよう、神の力が顕著なかたちで現されるはずであった。憐れみ深い創造主は、第四代に至るまで彼らの罪を忍耐することをよしとされた。そのときになってもなお良い方向への変化が見られなければ、神の裁きが彼らに下ることになっていた。

寸分の狂いもない精確さで、無限なるお方は今なお、すべての国々に対して勘定をつけておられる。悔い改めへの呼びかけとともにその憐れみが差し伸べられている間は、この勘定は開いたままである。しかし、その数字が神の定めた一定の額に達すると、神の怒りの執行が始まる。勘定は締められる。神の忍耐は尽きる。彼らのために憐れみを嘆願することは、もはやない。

予言者は、世々を見渡し、彼の幻にこの時代が示された。

この時代の諸国民は、かつてない慈しみを受けてきた。天の祝福のうち最も選りすぐりのものが彼らに与えられたが、増し加わる高慢、貪欲、偶像礼拝、神への侮蔑、卑しい忘恩が彼らに対して記されている。彼らは神との清算を急速に迎つつある。

しかし、私を震え上がらせるのは、最も大きな光と特権を与えられてきた者たちが、はびこる不義によって汚されてしまったという事実である。周囲の不義の者たちに影

響かれて、真理を告白する者でさえ多くが冷え込み、悪の強い潮流に押し流されている。真の敬虔と聖さに広く浴びせられる嘲りは、神と密接に結びついていない者たちから、神の律法への畏敬を奪う。もし彼らが光に歩み、心から真理に服しているなら、この聖なる律法は、このように侮られ退けられるときにこそ、彼らにはいっそう尊く思われるはずである。神の律法への軽蔑がいよいよ明白になるにつれて、それを守る者たちと世との間の境界線はいっそう鮮明になる。神の戒めへの愛は、ある者たちの間では増し加わり、別の者たちの間でそれらへの軽蔑が増すのに応じて高まっていく。

危機は目前に迫っている。急速に膨張する数値は、神の訪れの時がいよいよ来ようとしていることを示している。神は罰することを厭われるが、それでも罰し、それも速やかに。光のうちを歩む者は、近づく危険のしるしを見るだろう。しかし彼らは、神が訪れの日にご自分の民を守ってくださるという信念で自らを慰め、滅びを静かに、無関心のまま待ち受けて座してはならない。決してそうではない。彼らは、神の助けを強い信仰をもって仰ぎつつ、他の人々を救うためにたゆまず働くことが自分の務めであると悟るべきである。「義人の切なる祈りは大いに力がある。」

敬虔のパン種は、完全にその力を失ってはいない。教会に危機と落胆が最も深まる時、光のうちに立つ小さな群れは、この地で行われている忌むべき行いのゆえに嘆き叫ぶであろう。だが、とりわけ彼らの祈りは教会のためにささげられる。というのも、その信徒たちが世のならいにならって行動しているからである。

この忠実な少数者の切なる祈りは、むなしくはならない。主が復讐者として出て来られる時、主はまた、信仰を純粋なままに保ち、この世から汚れのない者として自らを守ってきたすべての者の守り手としても来られる。まさにこの時、昼も夜も神に向かって叫び求めるご自分の選民のために、たとえ彼らに対して長く忍耐しておられるとはいえ、神は復讐すると約束しておられる。

命令はこうである。『都のただ中を、エルサレムのただ中を通り、その中で行われているすべての忌むべきことのゆえに嘆き、叫ぶ人々の額に印を付けよ。』このように嘆き、叫ぶ人々はいのちの言葉を語り伝えてきた。彼らは戒め、忠告し、懇願してきた。神を辱めていた者の中には、悔い改めて御前に心を低くした者もいた。しかし、主の栄光はイスラエルから去っていた。多くの者がなお宗教の形式を守り続けてはいたが、そこには主の力も臨在も欠けていた。『証言』第5巻、207-210頁。

この箇所ではホワイト姉妹が特定している神の裁きの例は、エルサレムの都に下された裁きであり、終末時代においてはそれはセブンスデー・アドベンチスト教会を指します。その裁きは日曜法の時に最終的に確定します。というのも、そこで神の印と獣の印が押されるからです。エゼキエル書8章は、四つのエスカレーターしていく忌むべき行為を指摘しています。第一節は、第六年の第六の月の五日を示すことによって、この幻が恵みの時の終わりの直前に理解されるべきものであることを強調しています。

エゼキエルはその歴史的な言及を含める必要はなかった。彼は単に「そして、私が自分の家に座し、ユダの長老たちが私の前に座していたとき、主なる神の御手がそこで私の上に来た」とだけ書くこともできた。彼が「666」の前日への言及を含めたという事実は、預言を学ぶ者たちへの預言的な示唆である。獣の名の数に打ち勝った者たちは、「666

」がイエス・キリストの黙示の一要素であり、恩寵期間が閉じられる直前にその封印が解かれることを知っている。彼らがこれを知っているのは、彼らが神の民であり、ペテロによれば「かつては神の民でなかった」者たちだからである。

第一ペテロ2章で、今や神の民である人々は「主が恵み深いことを味わった」。彼らは、神の言葉を食べることを拒んだ者たちとは対照的に、神の言葉を預言的に「食べた」人々である。すべての預言者は終わりの日々について語っており、またヨハネの福音書6章で、イエスは弟子たちはご自分の肉を食べ、その血を飲まなければならない、と語った。その章で彼の肉を食べ、その血を飲むことを拒んだ弟子たちは、66節でそうした。

その時から、彼の弟子たちの多くは離れ去り、もはや彼と共に歩まなくなった。ヨハネの福音書 6:66

終わりの日にキリストの肉を食べ、その血を飲む賢い者たちは、パルモニとしてのキリストが「驚くべき数を数える方」であることを理解し、それが提示されるとき、そのしるしを見分ける。エゼキエル書八章の冒頭の節にある「665」という数は、見ようとする者には、少なくとも二つの重要な預言的要点を指し示していることがわかる。第一に、そのメッセージは日曜法以前の期間を扱うものとして理解されるべきである。第二に、「666」という数は、黙示録の中で、終わりの日に「賢い者」が理解すると明言されている、わずか二つの節のうちの一つに現れている。

ここに知恵がある。思慮のある者は獣の数を数えよ。それは人の数であり、その数は六百六十六である。ヨハネの黙示録 13:18。

「イエス・キリストの啓示」の封印が解かれる終わりの日における知識の増加を理解する「知恵ある者たち」は、「666」が重要な預言的象徴であることを知る。彼らはその数に対して勝利を得ているからである。したがってエゼキエル書第八章では、四つの次第に増し加わる忌むべきことによって表される、激化していく反逆が提示されている。最後のものは、愚かな者たちを太陽にひれ伏す者として特定し、終わりの日におけるエルサレム（アドベンチズム）への裁きを示す。その裁きは第四世代に行われる。その四つの忌むべきことは、ラオデキア的アドベンチズムの四世代の象徴である。

第一世代は1863年に、「七度」というモーセの誓いに対する反逆とともに始まった。25年後、1888年の反逆が現れた。さらに31年後、1919年の反逆が起こり、それはW・W・プレスコットの著書『キリストの教義』によって代表された。そのさらに38年後の1957年には、書物『教義に関する質問』によって代表される反逆が起こった。これから、これら四つの道しるべがエゼキエル書第8章の四つの忌むべき事柄とどのように一致しているのかを示していく。

1863年、ラオデキア派アドベンチズムは、ハバクク書2章の「この幻を書き記し、板の上に明瞭にせよ」という命令の成就であった二つの図表に代わる新しい図表を導入した。1863年の図表は、預言的図解から「七つの時」を削除した。これは、二つの聖なる図表では1260、1290、1335と並んで描かれていたものである。ハバクク書では、その命令は、板（複数形）が「それを読む者が走ることができるように」というかたちで公表されることを示していた。ところが1863年の図表はあまりにも外的外れで、それに解説の配布資料を添

える必要があった。追加の配布資料なしに1863年の図表を見て「走る」ことは不可能だった。

主は私に答え、こう言われた。「幻を書き記し、それを板にはっきりと記せ。走りながらでも読めるように。」ハバクク書 2:2

1863年の図表は、ウィリアム・ミラーが夢で見たとおり、本物を覆い隠すために作られた贗作であった。二つの聖なる図表は、地の獣における真のプロテスタントの角としての立場をとったばかりの民とキリストが結ばれた契約のしるしであった。その二つの図表は、1844年に突然ご自分の宮に来られたキリストとミラー派との契約関係のしるしであり、キリストはその時、契約の使者として来られた。古代イスラエルは現代イスラエルの型であり、キリストが古代イスラエルをエジプトの奴隷状態から連れ出されたとき、それは、キリストが現代イスラエルを教皇支配の1260年という束縛から連れ出される時を予表していた。ホワイ夫人は、これら二つの歴史を並行する歴史として繰り返し支持している。

「歴代に蓄えられた光が、私たちの上に輝いている。イスラエルの忘却の記録は、私たちの教訓のために保存されてきた。この時代に、神はあらゆる国民、部族、言語から、ご自身のために民を集めるために御手を伸ばしておられる。再臨運動において、神はご自身の嗣業のために、イスラエルの民をエジプトから導き出されたときと同じように御業を行ってこられた。1844年の大失望において、御自分の民の信仰は、紅海におけるヘブライ人の信仰と同様に試みられた。」『Testimonies』第8巻、115、116。

主が古代イスラエルと契約を結ばれたとき、主は契約関係を表すために二枚の板をお与えになった。主が現代イスラエルと契約を結ばれたときも、主は契約関係を表すために二枚の板をお与えになった。十戒の二枚の石板は、ハバククの二つの板を象徴している。紅海を渡った直後に、主は彼らにその二枚の板をお与えになったが、ホワイ夫人はこの紅海通過を1844年の大失望に結びつけている。預言史の上では、1844年の直後に主は第二の板をお与えになった。古代イスラエルには神の律法が委ねられ、現代イスラエルには神の律法だけでなく、そうした偉大な預言的真理も委ねられた。

「神はこの時代に、ご自身の教会を、古代イスラエルを召されたときと同じように、地上にあって光として立つように召された。力強い真理の鉞、すなわち第一、第二、第三の天使のメッセージによって、神は彼らを諸教会と世から分かち、彼らをご自身に聖なる親しい交わりのうちに近づけられた。神は彼らをその律法の受託者とし、この時代のための偉大な預言の真理を彼らに委ねられた。古代イスラエルに委ねられた聖なる託宣と同様に、これらは世界に伝えられるべき聖なる委託である。」『Testimonies』第5巻、455ページ。

最初の二つの戒めは、神が偶像礼拝を憎まれることを示しており、また、その最初の二つの戒めの中で、神はご自分がねたむ神であるゆえに、裁きが三代、四代にまで及ぶことを明らかにしておられる。

この時に語られた律法は、ヘブライ人だけの益のために語られたのではなかった。神は、彼らをご自分の律法の守護者、保持者とすることによって彼らを重んじられたが、それは全世界のための聖なる信託として保持されるべきものであった。十戒の諸戒

はすべての人類に適合しており、万人への教えと統治のために与えられた。簡潔で包括的かつ権威ある十の戒めは、人が神に対して、また隣人に対して負う務めを網羅しており、しかもそのすべては愛という大いなる根本原則の上に据えられている。「心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛なさい。また、あなたの隣人を自分自身のように愛なさい。」ルカ 10:27。また、申命記 6:4, 5; レビ記 19:18 も参照。十戒において、これらの原則は詳細に具体化され、人間の状態と境遇に適用できるようにされている。

『あなたには、わたしの前に、ほかの神々があってはならない。』

エホバ、永遠にして自存し、創造されざる方、すべての源であり支え手であるお方こそ、至上の畏敬と礼拝にただひとりふさわしい。人は、その愛情や奉仕において、いかなる他のものにも第一の座を与えることを禁じられている。神への愛を弱めたり、神にささげるべき奉仕を妨げたりする傾向のあるものを私たちが大切にするなら、私たちはそれを神としてしまう。

自分のために、刻んだ像を作ってはならない。上は天にあるもの、下は地にあるもの、また地の下の水の中にあるものいかなる形も作ってはならない。それらにひれ伏してはならず、仕えてはならない。

第二の戒めは、まことの神を像や似像によって礼拝することを禁じている。多くの異教の国々は、自分たちの像は神を礼拝するための単なる図像や象徴にすぎないと主張したが、神はそのような礼拝を罪であると宣言された。永遠のお方を物質的な対象物で表そうとする試みは、人の神についての観念を低めてしまう。ヤハウエの無限の完全さから心がそらされると、創造主よりもむしろ被造物に惹かれるようになる。そして神に対する観念が低められるにつれ、人間もまた墮落していく。

「わたしは主、あなたの神、ねたむ神である。」神がご自分の民と結ぶ親密で聖なる関係は、婚姻の比喻によって表されている。偶像礼拝は靈的な姦淫であるから、それに対する神の御怒りがねたみと呼ばれるのはふさわしい。『族長たちと預言者』 305、306。

神のねたみは特に偶像礼拝に対して顕著に表れ、エゼキエル書8章で最初の忌まわしいものが「ねたみの像」であるのは偶然ではない。

第六年の第六の月、その月の五日に、私が自分の家に座しており、ユダの長老たちが私の前に座っていたとき、主なる神の御手がそこで私の上に臨んだ。私は見ると、見よ、火のような姿があった。腰から下は火のように見え、腰から上は輝きのようで、琥珀の色のものであった。彼は手の形を伸ばし、私の頭の髪の一房をつかんだ。すると霊が私を地と天の間に持ち上げ、神の幻のうちに私をエルサレムへ連れて行き、北に向いている内なる門の入口に至らせた。そこには、妬みを引き起こす妬みの像の座があった。見よ、イスラエルの神の栄光がそこにあった。私が平地で見た幻のとおりであった。彼は私に言った。「人の子よ、今、北の方を見上げよ。」そこで私は北の方に目を上げると、見よ、北側、祭壇の門の入口に、この妬みの像があった。エゼキエル書 8:1-5

「ねたみの像」は、エゼキエルに示された四つの、次第に激化していく忌むべき事柄のうち最初のものである。「ねたみの像」は、アドベンチズムにおいて反逆が四世代にわたリエスカレートしていく、その第一世代の始まりを表している。第一世代は1863年に始まった。

次回の記事でこの研究を続けます。

「古代の預言者たちは、それぞれ自分たちの時代のためというよりも、むしろ私たちの時代のために語ったのであって、したがって、彼らの預言は私たちに対して効力を有している。『さてこれらの事は、みな彼らに対する手本として起こり、世の終りに臨んでいる私たちへの戒めのために書かれたのである。』1 Corinthians 10:11. 『彼らは、これらのことが自分たち自身のためではなく、あなたがたのために仕えていたのであって、そのことは、今や、天から遣わされた聖霊によってあなたがたに福音を宣べ伝えた人々を通して、あなたがたに告げ知らされているのである。これらのことは、御使いたちも、うかがい見たいと願っていることである。』1 Peter 1:12....」

「聖書は、この最後の世代のために、その宝を蓄え、ひとまとめに束ねてきた。旧約聖書の歴史におけるすべての偉大な出来事と厳粛な事柄は、この終わりの時代の教会において、これまでも、そして今もなお、繰り返されている。」『セレクトッド・メッセージズ』第3巻、338、339頁。